

故郷の友人たち



「ねえっていちゃん。今度の法要の帰りにうちに寄って泊まっていってよ。私ひとりだからうんと散らかしているけど」

私たち夫婦は、七月海の日、父の遺志を守って、毎年「全戦没者慰霊法要」を信州霧ヶ峰の昭和時で行っている。その慰霊祭に毎年参加して加勢してくれている同級生の丸茂弘子から誘われたのは、七月はじめのことだった。彼女は茅野から八ヶ岳の方角に十キロほどの農村に住んでいる。

今年平成十七年は五日後の二十三日に朝河貫一研究会が早稲田であり、入来文書邦訳刊行直前といったこともあって欠席出来ない。薪能の準備で忙しいさなかながら飛行機代が惜しいので、夫ひとりが帰鹿、私はそれまで在京するつもりだった。いっぴになく帰宅までの日に

ちがあるので私は彼女の申し出を喜んで受けた。

十九日朝十時、彼女はススキのマヨールの軽を運転して、諏訪市にある私の美家まで迎えに来た。

前々日の十七日、私たちの母校の先輩伊藤千代子の生誕百年を記念して、澤地久枝の講演会が諏訪市であり、千人を越す盛会だったといふ。弘子も私も都合があつて参加していなかった。

「みんなはお墓参りをした筈だから、私たちもお参りしようよ」

といふ彼女の提案に同意して、彼女のきこちない運転にハラハラしながら、お互いが初めての諏訪盆地の道を見当をつけただけで走った。

伊藤千代子は、諏訪高女の母の二級先輩で、貧富の差の激しい世の中に抵抗して、昭和三年治安維持法により逮捕され、市ヶ谷刑務所で拷問、虐待を受け、翌年、二十四歳の若さで亡くなったといふ。私たちはつい最近までその存在すら知らなかった。転向した夫、詩人の浅野晃が生前、秘蔵していた彼女の手紙が公表され、それが彼女の顕彰のきっかけとなつたらしい。お墓も整

備され、当時校長だったアララギ派の歌人土屋文明の作った彼女を悼む三首の歌碑がその傍らに建てられたといつことだった。

南面に山を背負った諏訪盆地の東南の村から、諏訪高女に通っていたといつことは、当時は小学校で一、二の優秀さで、ある程度の資力もあつた家の娘の筈で、何が彼女を動かしたのか。まっすぐな正義感の持ち主だったであろうし、夫浅野晃を深く信じていたのだらうと思つた。

迂闊で粗忽者の私たち二人は、すぐそばまで行きながらその墓も歌碑も見つけることが出来なかつた。

ついでに言えば、私の母校の先輩たちは、平林たい子、藤原てい、新田次郎の奥さん、流れる星は生きてゐる、歌人の今井邦子や、葦折れぬの茅野敏子など、みんなカッキリと自己を表現してきた。

私の母、山崎志津子も作品こそ残してないが、女性のパイオニアとして母校に名を留められるべきと思つた私は、いしか伝記をじっくり書きたいと思つてゐる。

私の家は、諏訪市内も旧甲州街道沿いの諏訪郵便局

本局の隣、駅から五分といつ便利な所といつこともあつたので、郊外は全く不案内である。

初めて訪れた弘子の家は茅野市から十五分ほどのところにあつた。茅野市は以前は寒天作りが有名といつだけの単なる町だったが、バツクに白樺湖や蓼科など広い自然を抱えていることもあつて、近年発展目覚しく、人口でも諏訪市を超えているといつ。

「ちよつと私の畑を見よう。」

といつので、サンダルをつつかけて後について出た。鯉や緋鮒の見え隠れする池や植え込みのある庭の奥に小ぶりの土蔵と物置があつた。その裏手に黒いビニルを敷き詰めた畑があり、ナス、トマト、とうもろこし、インゲンなどなどの夏野菜が整然と植えられていた。かぼちゃやきゅうりは地面に這つて生っている。広さは約三畝で、その外の二畝にはソバを撒いてあるといつ。

「どうお、これは私がひとりやつてゐるんだえ。このビニール敷きなんか何日もかかることだね、大変だよ。」

彼女は手にした鍬で、形よく成長したインゲンを摘んだ。夢見がちな文学少女で、なんとなく動作も緩慢な彼女

がいかにも手のかかりそうな野菜作りをやりこましているとは、思いがけなく、ただただ脱帽といった思いで眺めた。

気持ちよいそよ風の中、見渡せば守屋山の山系が田畑の遠くに横たわり、東には八ヶ岳の峰々が重なるように臨めるのだした。

仏壇のある茶の間でお茶を飲みながら、彼女の持ってきたアルハムを眺めた。彼女の夫は二十年も前になくなり、二人の娘を彼女ひとりで育て嫁に出していた。見知らぬ彼女の親戚などの説明を受けながらゆっくりとめぐっていると、何枚かの高校生時代の写真が出てきた。中に私ひとりが学校の庭で、画板を膝に絵筆を走らせている写真があった。

「まあ、ひろちゃん、私は私の写真まで大事に貼ってくれて」と意外に思っているうちに、もっとびっくりする写真を発見した。

それは昭和三十三年、私の長男の誕生祝に来た入院の従兄夫妻と私の母、それに生まれたばかりの長男を大切そうに抱いた夫の横に退院直後の腫れぼったい

顔の私が写っているものと、その三日後、初節句を祝って初給料で鯉幟を買ってきた夫の親友と私の母、叔母、弟、従弟が私たち夫婦を囲んでいるものであった。脇の柱にその鯉幟が吊るされ、前のちゃぶ台には入社したばかりの夫に課長がプレゼントしてくれた菖蒲の飾りのついた丸いキーキが置かれている。どちらも昔の5センチほどの小さな写真である。どうしてこの写真が弘子のアルハムにあるのか。訪ねて来た記憶もなかったが、ともかく大切な写真として彼女のアルハムにそのあるということが驚きでもあり嬉しく胸を打つものがあった。

前日、昭和寺の法要に、弘子は彼女の近所に住む写真愛好家田中氏を同伴して霧ヶ峰に来ていた。

実は彼女は私の伝記を書いて、長野日報社の文学賞ノンフィクション部に応募して、原稿を田中氏にワープロで打ってもらっていたのだ。田中氏はその弘子の文から昭和寺での法要に興味を持つようになり、参加してくれたのだといふ。大正十四年生まれといつが、さすがに元海軍さんといふことで背筋もシャッと微塵もボケを感じさせない。17mmのデジカメで法要の写真を撮って

くれていて、弘子の家に来たときは寄ってほしいと言われていた。私はいまや何処にあるかさだかでないその一枚の写真を彼にパソコンに取り込んで我が家にメールしてもらいたいと思った。なんとか苦労してその写真をアルムからさがし、弘子と田中氏の家に出向いた。

田中氏の奥さんに招じられるままに奥に入ると、すでにテーブルの上には色鮮やかな法要の日の様々なヌッブが並べられてあった。田中氏は遠慮ない私の申し出に快く応じ、最新の映像処理のツールと大判の立派な写真にしてくれた。さうだ。

弘子宅に戻ると弘子の小、中学校の同級生で、高校三年のとき生徒会の本部役員の書記をしていた岩波乃里栄が訪れて来た。弘子の心づかいで私に会いにくるよう声をかけてあったのだという。生徒会本部は正副会長、事業部、文化部、運動部の三部のそれぞれ正副部長、それに書記の九名だった。正副会長は非進学者から選ばれ、各部の下に、それぞれ個別の部があった。私は文化部長。ここには、文学、地歴、絵画、書道、音楽など十ほどの部があり、生徒全員がいずれかに所属せ

ねばならなかった。私の副部長の小川きよ子も控え目な賢い美少女だった。

当時は受験勉強といつても大したこともせず随分とのびのびした高校生活を送っていた。茶目っ気いっぱいの私は、殆どの教師一人ひとりに「デカンショ」を作詞した。そして卒業式のお別れ会に本部役員全員で壇の上から歌い、先生方の目を剥かせたことがあった。私のすっかり忘れていたそんなことを、弘子は歌詞まで覚えていて、それも彼女の原稿のなかに載っているのだった。

乃里江は、当時からしつとりと落着いた人で、控え目に仕事をこなしていた。高学歴の家族の一員と思われた。

平成六年、鹿児島県の夫の故郷に帰ることになった私は

平成八年の同年会は鹿児島でやることにしよう。それまでに今から十万円貯金しておいてね。」

と言いきりして来た。それは本当に実行され、総勢四十余名の大旅行となった。入来から指宿に向かう途中、沈寿官窯に立ち寄った。十四代寿官さんが一行を

出迎えて、希望する一人一人に色紙に本人の名前と俳句を書いて署名してプレゼントしてくださった。私は寿官さんが岩波乃里栄」といつ彼女の名前に、
「さすが信州の人の名前ですねえ。鹿児島にはこんな名前はありませんよ。」

と言われたことを記憶している。

終戦当時、京都大学の仏文から学徒動員していた若い岩波氏が復員して彼女たちの中学の教員をしていて、乃里栄は高校卒業後彼と結ばれた。アルハムの中の彼はすらりとした長身で、考え深げなまなざしの人で、さぞロマンの花が開いたことだったろう。弘子も岩波先生に憧れていたのではと思われた。

昔は私もフランス文学はよく読んだものだったわ。ロマンが一番好きだったけど、ご主人は誰が専門だったの？」

「バルザックよ。」

バルザックは私も目ぼしいものは殆ど読んだものだった。家にはロマンもバルザックも全集があるが、この十年殆どひもといたことがない。

「高校時代はよく読んだね。『ポボー家の人々』とか」

弘子も応じた。マルタン・デュールも当時人気だった。私は乃里栄の早世した夫へのしみじみとした思い出を書いた『セイ』を読んだ記憶があつて、もっと詳しい話を聴きたいと思っていたが、姑の世話を控えている乃里栄は帰り時間を気遣うので、会話も何となく落着かなかつた。

帰るといつ乃里栄を押しとどめ、弘子はテーブルに心づくしの貝柱の炊き込みご飯や焼き魚、サラダや山くらの煮物などの夕食を並べた。私は家事が苦手だった筈の彼女が、これだけの献立にどのくらい氣をつかったかを慮った。食事が終わると乃里栄はそそくさと、弘子がこまめに詰め合わせた姑用の弁当を手に乗りに乗った。

「ぞつだ。写真を撮っておけばよかった」

彼女の言葉に、私も思い至らなかつたことを悔いた。

一期一会といつ語をこの頃は痛感することが多い。

夕食後はずっと話すことが多かったはずなのに、私のまぶたは落ちてしまふ。楽しみにしていたらつ弘子に

悪いとは思いながらも睡魔には勝てなかった。しかし朝型の私は四時には目が覚める。隣室から弘子の心地よい寝息が聞こえた。

私は朝九時のあずさで東京に戻らねばならないせわしい思いをさせてしまったが、朝食には、彼女の畑からの野菜が並んだ。そして艶やかなナスやインゲン、荷物になるといつ私の言葉を制して詰め込むのだった。来年は、もつという見せたい処があるから、もつ少しゆつくり滞在するつもりにと熱心に言いながら。

車で茅野駅に着くと彼女が重い荷物を改札口まで運んでくれた。ホームに降り立って見上げると渡り廊下の窓から手を振る彼女の姿があった。

彼女の十日ほど書き上げたといつ二十枚の私の伝記は、結局は予選を通らなかつたといつ。実をいつと私は内心ほつとしてゐる。じつくりと時間をかけて枚数を気にせず書き込んでほしいと思う。えしく苦しくともまじめに、明るくのびのびと生きた私たち世代の記録として、そしてそれが彼女の代表作となつてくれれば私も嬉しい。

故郷を遠く離れ十年。もう七十才を超えた私の人生に、弘子との一日がどんなに貴重な一日だったことか。彼女の友情をずつりと感じた私は、東京に着いた夜、息子のパソコンを借りて、帰鹿を待たずにこみ上げてくるこの温かい思いを記録しているのです。

平成十七年七月二十二日記

友よりの手紙

岩波 乃里栄

暑い日が続きますが、お元気でございますか。先日は久しぶりにお会い出来て嬉しゅうございました。

弘ちゃんが、今貞子さんの文章を持ってきました。

「貞ちゃんに暑中見舞いでも出しておいたら」

とお達しますが、読ませて頂いてすぐお便りを書きたくなりました。先日は弘ちゃんの心づくしで、貞子さんとお会い出来まして、ほんとうに、その一刻、一刻が一期一会の時と思います。そしてこの上なく人と人の繋が

りの縁」を思うのです。

あの日、そそくさと帰った私と書かれておりましたが、『夏風邪は八力がひくものだ』と、思う私は、絶対お二人はオリコリだから、私のが移って夏風邪などひかないだろうとは思いましたが、遠く八ヶ岳の麓までお出でになつたのに、風邪を移してしまつたら、何とお詫びすればいいかと、心配になつてしまつたのです。あれから母(始ではなく実母です)のころにも寄らず、夜は誘眠剤を飲んでぐうぐう寝てしまいました。回復までに十日もかかりましたが、今は元に戻つて元氣になりました。

折角のお話出来る機会でしたのに、大変失礼を致しました。

弘ちゃんは元氣印で活躍しています。今晚(六日)は茅野市の年一回のお祭で、彼女は私に貞子さんの文章を持って来てくれた時、『今夜は踊り連に出て踊るからテレビ(地元テレビ)で観てね、赤いヤツ着て踊るから目立つよ』と威勢よくお尻を振つて行きました。

ドンパン ドンパン 茅野ドンパン ドンパン ドンパン ド

ンパンヤ

ドンパン踊りを茅野市のメイン通りで、三千四百人の連の一人として、彼女も颯爽?として踊りまくっているのでしょう。結構なことですよ。

六月の下諏訪の同年会に出席しました。それぞれの人生の中で、皆さんい表情でした。小松先生が自分で、竹竿からお手作りなされた、尺八を吹いてくださいました。

亡くなつた同年の人々に鎮魂の心を込めて、子守唄を吹きます」

『ねんねん ころりよ おころりよ…』

哀調を帯びた尺八の音。涙がホロリ…。

「…私の心臓はある時、突然狂い出しました。その時、Dに言われました。『このまま何もしなかつたら三年以内に必ず発作が起きる。そうなれば手遅れといつことになりかねない。今、心臓弁を人工のものど、とつかえつこしたら或いは改善されるだろう。ちなみに人工弁は三百年もつことになっています。まだ実証されてはいませんが…。』といつことで私の心臓弁はとつかえつて

六年経ちました。今、ほんとの健康はこんなに身体が楽なんだという実感を貰っています。もし六年前に見つけて貰わなかったら、今日の日に私は先に逝ってしまつた友達と、あの世で小松先生の尺八で「子守唄」を聞いていたのでしょうか。今日ここで皆さんとお会い出来て感慨一人のものがあります」と私。

後で小松先生がそこと私に言つて下さいました。

「よかつたねえ。元氣になれて・・・」

私、小松先生の化学を選択して、しかもその理由は試験管を振る手つきに魅せられてといつ少女趣味。自分自身もあきれれるのですが、小松先生の授業で覚えていたのは唯一。

「私は先生の授業の元素記号で、葉緑素が『C H O N Mg チョンマグ』と教えて頂いたことしか覚えていないのです。化学には懂れていたのに・・・」

「それだけ覚えていれば結構です。たいしたもんだ」と先生はあきれながらも、変な慰めの言葉をくれました。七十になった私、とつても嬉しくて、やっと化学の単位

が取れたよつな、安らぎがありました。

「・・・人生を振り返つてみれば、そこには、ただ風が吹いているだけ・・・」

といふ歌がありました。が、出来ればい風が爽やかに吹き抜けて行つてほしい・・・と九十二才の母と毎日対峙して思つこの頃です。

今更ながらで申しわけありませんが、鹿兒島での旅はほんとうにお世話になりました。貞子さんがいらつしやらなければ、あんなにい旅は出来なかつたと改めて感謝いたします。

沈寿官さんのことは、私も生涯忘れることはないですよ。あの時、武居登志子先生が

「あなたもこのお皿買いなさい」

と言つてくださつて買った小皿五枚、見るたびに寿官さんと、武居先生と鹿兒島に住む貞子さんを思い出します。

どうかお元気で活躍なされますよつ。

平成十七年八月六日

